

中国における初等教科「品德と社会」の内容構成原理

—「公民意識」の育成を中心に—

蔡 秋 英

(2007年10月4日受理)

A Study on the Construction of Contents Elementary Subject “Moral and Society” in China
— From viewpoint of the developing of “Awareness of Citizenship” —

Cai Qiuying

Abstract. This paper focuses on the contents of the subject “Moral and Society” at elementary school in China, with the aim of analysis is revealing the principles of the Construction of content and meaning in the subject. The result of the analysis, this subject is constructed of the elements below. The sequence is arranged following the principle of expanding environment which developing from individual, household, schools, community, country, nation, to the world. Therefore, the subject is intended that the learner can understand the social phenomena closing their life readily. And they can be fostered the ability to participate to the society and the awareness of citizenship like the moral practice and relationship for the society through the learning.

Key words: The elementary education, Citizen awareness, Citizenship education, Construction of content

キーワード：初等教科，「公民意識」，公民教育，内容編成原理

I. はじめに

21世紀に入って、世界の各国では、社会の構成員として公共生活に責任を果たして自ら考え行動しようとする公民を育成するために公民教育 (citizenship education)¹⁾の重要性に目を向けようとしている。

中国でも、改革開放以来政治、経済、文化などの面での急速な変化により、現代社会を担っていく公民を育成するために、公民教育に関する研究が盛んになされている²⁾。即ち、公民教育を通して、社会生活に影響を与える意志、能力や技能、責任感を持って、自ら社会的問題解決に積極的に参加し、社会の健全な発展を促すより高い公民的資質を育成することを求めている。そのためには、学校教育においても、公民的資質の育成をねらいとする公民教育の展開に着目することが必要である。

公民的資質には、主に「公民知識」「公民能力」「公

民意識 (態度・価値観)」が含まれている。「公民知識」とは民主的国家において、責任感を持った良い公民が身に付けるべき基本的観念や情報であり、「公民能力」とは国家や政府を理解し、評価する能力と実践に必要な能力、社会の公共政策に参加する能力などをいう。また、「公民意識」とは民主的国家や社会を認識し、維持し、改善するのに必要な態度や価値観などをいう。

この中で、「公民意識」の育成は公民教育の中核となるものである³⁾。現代の「公民意識」には「国家意識」「法律意識」「民主意識」「公德意識」「環境意識」が含まれている⁴⁾。「国家意識」とは中国公民として国家主権と領土保全を守り、民族の尊厳を維持する態度や価値観である。「法律意識」とは法律や規律を分かち、守り、活用する意識や態度である。また、「民主意識」とは家庭や学校、地域社会の主人公的責任感、社会生活や国家大事に積極的に参加する社会的責任感、歴史的使命感である。「公德意識」とは団結、平等、友愛、

共同前進などの良好な道徳と良好な人間関係を形成することである。「環境意識」とは自然や社会環境を保護し、「優しい地球づくり」のための意識や態度である。

このように、「公民意識」は子どもたちが社会に責任感を持って、積極的に参加する態度や価値観であり、公民的資質の重要な部分を構成している。

そこで、現代中国の学校教育においては、市場経済の発展と民主化の進展により、「公民意識」を高めることを重視している。

では、中国の学校教育において、「公民意識」をどのような内容で高めようとしているのであろうか。

本研究では、以上の問題意識に基づき、中国小学校において公民教育の役割を果たしている教科「品德と社会」を取り上げ、各学年の内容を分析することを通して、内容構成原理とその意義を明らかにしていきたい。

Ⅱ. 教科「品德と社会」の概要

教科「品德と社会」は21世紀の教育課程改革により、従来の小学校「思想品德」科と「社会」科が統合され、3学年から6学年に新しく設けられた教科である。本研究において分析対象となる「品德と社会」の教科書は2002年6月に公布された「品德と社会課程標準（実験）」（以下「課程標準」と省略）に基づいて、人民教育出版社により開発されたものである。本教科書は、各学年に上巻と下巻の2冊ずつ、計8冊からなっている。

「品德と社会」は、「子どもたちの社会生活を基礎として、良好な道徳の形成と社会性の発展を促す総合的課程」⁵⁾である。また、「子どもの社会生活を主な手がかりとして、道徳、行為規則と法律教育、愛国主義、集団主義と社会主義教育、国情、歴史と文化に関する教育、地理と環境教育などを内容」⁶⁾としている。

これらの学習を通して、子どもたちに身近な社会環境、社会活動と社会関係とのつながりの中で、自分の経験、感情、能力、知識を豊かにするようにする。また、自分自身と他人や社会に対する認識、理解を深めさせ、良好な習慣と基本的な道徳観、価値観、道徳的判断能力を身につけさせ、現代社会に対応できるよい公民となるための基礎を定めるようにする。

そこで、教科の編集において中核となる目標を、「子どもの生活を基礎として、『正しい人間性』を育成すること」⁷⁾としている。「正しい人間性」とは、豊かな心と主体的な人格を持った独立した人間、社会に対応できるし、社会生活に参加し、愛の心と責任感を持った人間、また、現代社会に必要な資質とグローバル意識を持った人間を指す。このような人間になる過程は、子どもたちが自分自身と他人や社会を理解・認識し、

そのつながりの中で、社会性の発展を実現し、正しい感情・態度・価値観を形成する過程である。その過程の中で、社会的知識の獲得、相応能力の育成、感情・態度・価値観の形成は総合的に入り組まれている。

以上の理念に基づき、「課程標準」では、本教科の学習目標を、「子どもたちが社会を認識し、社会に参加し、社会に適応することによって、良好な道徳の形成を促進し、社会性を発展させるとともに、思いやり、責任感、良好な行為習慣と個人的資質を持った社会主義にふさわしい公民の基礎を培うこと」⁸⁾としている。また、具体的な目標を感情・態度・価値観、能力、知識の3つの面から以下のように示している。

感情・態度・価値観目標

- ・命を愛し、生活を愛するなどの面での態度
- ・生活の中で必要な良好な資質
- ・社会生活に参加する民主、法律意識と規則に従う意識
- ・愛国主義感情と国際意識
- ・自然を愛し、環境を保護する意識

能力目標

- ・自己認識、自己保護、自分のコントロール、良好な生活習慣などの面での能力
- ・他人との交流と協力、集団生活への参加などの面での能力
- ・社会現象とモノに対する観察、認識、分析、社会問題解決などの面での能力
- ・情報の収集、整理、分析、活用などの面での能力

知識目標

- ・自分自身、他人や社会との関係
- ・生産、消費、生活との関係
- ・人間と自然、環境との関係
- ・中国の民族、歴史、文化、建設など
- ・世界歴史、文化、交流など

上記の目標からもわかるように、本教科は社会を認識して、積極的に社会に参加しながら対応できる中国公民としての公民的資質を育成することをねらいとしていることがうかがえる。では、このようなねらいを、どのような内容を取り上げることで、達成しようとしているのか。以下では、学年ごとの内容編成を解明していきたい。

Ⅲ. 教科「品德と社会」の全体構成

1. 第3学年における全体構成と内容領域

表1は、3学年の全体構成を示したものである。表1のように、各巻は子どもの生活を反映している4単元からなっており、また各単元は子どもの経験と学習生活に役立つテーマを多様な視点から選択した3～4の課からなっている。

まず、上巻では子どものよく知っている家庭生活、

学校生活、社会生活から出発し、「学び」、「ルール」と「責任」という概念を中心に、様々な学習活動（調査、参観、討論、展示、交流など）を通して、生活環境と人間、人間と人間とのかかわり及び自分の成長とのかかわりについて初歩的に認識させる。また、正しい道徳的資質と判断能力、最も基本的な社会公德意識（ルール意識、責任意識など）を樹立させる。例えば、「私の家庭」では「帰宅する」という最も普通な生活現象をテーマとして、自分はなぜ放課後帰宅するのか、父と母はなぜ仕事の後帰宅するのか、外出した人々はなぜ帰宅するのか、など「人々はなぜ帰宅するのか?」という問いを設定して、考えさせ、討論させる。子どもは其中で、家族への帰属感を獲得し、生活に対する思考と関心を高める。

子どもの正しい道徳的意識は幼い頃から形成することが必要である。そこで、上巻では学校、家庭、地域社会での学習活動を通して、正しい判断能力を育成して、学びに対する態度、規律やルール意識、家庭、学校、社会における自分の役割意識と責任感などを形成させる。例えば、「誰に学ぶか」では、いくつかの道徳的行為についての図を提出して、正しいかどうかを判断させる。子どもは思考の中で、生活中の諸現象について、何を学ぶべきか、何がだめなのかを考えることができる。これらは、公民として備えるべき最も基本的な公民的資質であろう。

子どもの頃から人間に対する理解能力を育成することは、子どもの調和の取れた人間関係や正しい人間性の形成に基礎を定める。そのため、下巻では「温かい『愛』の下で」、「仲良く共存する私たち」、「私たちの生活に必要な人々」という単元を設置している。

「温かい『愛』の下で」では、家族の話の聴いたり、学校や社会の職員を調査、訪問したり、子どものためのサービスに関する資料や情報を収集、観察したりするなど具体的な活動を通して、自分成長のために苦労している身の回りの人々についての「愛」と「尊重」の感情を形成させる。

「仲良く共存する私たち」、「私たちの生活に必要な人々」では、観察、調査、展示、模擬活動、インタビューなどを通して、社会生活中の人間の相互依存関係、共存共生関係の意識を形成させる。例えば、「相手の立場で考える」では、自分が相手と対立した時、矛盾と衝突があったとき、立場を換えて相手の感情や考え方の角度から考え、人間愛と正しい人間関係を感じさせる。また、「分かち合いの喜び」では、他人と分かち合う活動を通して、人間との交流、協力、分かち合いの態度を形成させる。「常に感謝の気持ち」では、感謝する時としない時を表現することから感謝の気持ち

表1 第3学年における「品德と社会」の全体構成

巻	単元	課
上巻	1 家庭、学校、地域社会	・私の家庭 ・私たちの学校 ・私たちの地域社会
	2 学びの中で成長する	・私の学んだこと ・誰に学ぶか ・学びの主人公になる ・みんなが学ぶ
	3 ルールを知る	・ルールはどこに? ・ルールの意義は? ・ルールを決めよう
	4 私の役割と責任	・私は誰? ・私の責任 ・私のできる事
下巻	1 温かい「愛」の下で	・家族の愛 ・親の心を知ろう ・地域社会からの愛
	2 仲良く共存する私たち	・異なる君、私と他人 ・相手の立場で考える ・分かち合いの喜び
	3 私たちの生活に必要な人々	・私たちの生活に必要な人々 ・おじさん、おばさん、ご苦労様 ・常に感謝の気持ちで
	4 道を探すことと道を行くこと	・平面図を知ろう ・校外の道探検 ・お出かけ学問 ・遊び場ではない大通り

(課程教材研究所編、義務教育課程標準実験教科書『品德と社会』第三学年(上巻、下巻)人民教育出版社、2003年より筆者作成)

ちを体験し、他人の労働を尊重し、他人の労働成果を大切にすることを意識を高めさせる。

また、今までの身近な生活環境に関する初歩的認識を基礎として、地図を読む方法を身につけ、相応の交通安全とルール意識を持つ。

以上から、3学年の子どもは、生活環境の中でよく知っている問題や課題を思考、判断、理解、解決する中で、社会生活を基本的に認識し、学習態度、ルールと責任意識、人間愛と人間関係、交通安全意識などといった最も基礎的な道徳観念と資質を形成していく。

2. 第4学年における全体構成と内容領域

表2は、4学年の全体構成を示したものである。表2のように、各巻は4単元からなっている。また、各単元は3～4の課からなっている。

上巻では、子どもの社会生活を中心に、個人から社会までを手がかりとして、命の教育、消費に関する教育、他人への思いやりなどの内容を通して、社会的責任感や良好な生活習慣などの道徳的観念を育成する。

命の教育では、自分の命を大切に、動植物の生命を愛し、他人の命のために自分の愛をささげるなどの内容から、命の大切さを感じさせ、命に対する責任感を育成する。例えば、「美しい命」では、動物をいじめたり、樹木の枝を折ったりするときの動物や樹木の

気持ちを討論する中で、命の大切さを感じさせる。また、「自分の体を大事にしよう」では、生活の中で、自分の生活習慣を探して、よい習慣と悪い習慣に分けて、良好な生活習慣をどのように身につけるかをみんなで討論し合う。また、生活とかかわる安全標識と施設に関する理解を通して、安全な生活のための公共安全意識、危険に遭った時の自己保護意識などを形成させる。

消費に関する教育では、家庭の収入と支出の情況、お金の有限と需要の無限、買うべきものと買わなくてもいいものなどの理解や判断を通して、合理的で計画的な消費方法を身につける。このように、従来のお金を節約する知識だけにとどまらず、合理的な消費行為を行うような能力の育成をより重視している。それ以外にも、「買い物場所を知ろう」では、現場での買い物活動を通して、買い物の方法やお金の支払い方法などを体験させる。

他人への思いやり、特に幼い子、お年寄り、障害者などへの思いやりは、社会の中で生活している人々の守るべき規則である。子どもに、思いやりの活動を行わせて、公衆意識と社会的責任感を形成させる。

下巻では、もっと広くて多面的な角度から出発して、故郷を愛する感情、生活と生産、交通、情報との関係などの内容から、社会を理解、認識し、探究する過程の中で、人間関係の問題や社会問題を解決する技能や能力を身につけ、健全な人間関係意識と社会意識を形成することをねらいとしている。そのために、社会現象や問題を探究し、認識することを重視している。

「私の故郷」では、自分の故郷を愛する教育を行う。故郷の風景名勝、風俗文化、自然環境、地域の特色、歴史の変遷などを内容として、故郷を理解するとともに、その中での関わり、例えば、地域と居民の関係、機構と飲食の関係、歴史と古跡の関係などについて探究させる。そのような学習を通して、関連の地理知識（方位、縮尺、地理的位置など）を身につけさせる。また、故郷は祖国の一部分であることを認識させ、子どもの故郷を愛する感情を形成させる。

「生産と生活」では、工・農業生産を内容としている。子どもにとって、工・農業生産はよく知らないことであり、生活経験と体験が不足している。そこで、生活の中で、自ら体験しながら工・農業生産を理解し、認識することをねらいとしている。そのために、日常生活の中の工農業生産品、例えば、衣食と日用品などを手がかりとして、それらと日常生活との関係を探究し、労働者と農民の労働や知恵を体験する中で、生産労働の情況を理解し、生産過程での分工と協力を分からせる。また、生活の需要と生産の発展との関係を知

表2 第4学年における「品德と社会」の全体構成

巻	単元	課
上巻	1	命を大事に ・美しい命 ・私たちの命 ・自分の体を大事にしよう
	2	安全な生活 ・今日、安全であるか ・危険を拒否する公共場所 ・危険に遭った時
	3	お金使いの学問 ・家族の家計簿 ・お金をどう使うか ・買い物場所を知ろう ・賢い消費者になろう
	4	他人への思いやり ・喜ぶおじいさん、おばあさん ・思いやりを持って ・町の人々と同郷の人々 ・みんなの事はみんなで
下巻	1	私の故郷 ・私の故郷はどこに？ ・故郷の風景と人々 ・深い郷土愛
	2	生産と生活 ・衣食、生活用品はどこから？ ・テレビの変遷から語る ・生活中の様々な業種
	3	交通と生活 ・様々な交通手段 ・交通と私たちの生活 ・昔から現在の交通を語る ・交通問題からの思考
	4	通信と生活 ・世の中をつなぐ情報 ・烽火台からネットワークまで ・小さな窓口から大きな世界を語るテレビ

（課程教材研究所編、義務教育課程標準実験教科書『品德と社会』第四学年（上巻、下巻）人民教育出版社、2003年より筆者作成）

り、労働手段の改進による生産の上昇と労働強度の減少などについて初歩的に理解させる。

「交通と生活」では、生活と密接にかかわる交通について理解させるとともに、子どもの社会生活能力を育成する。そのため、子どもに港、駅、空港などのサービス施設について認識させたり、車、船、飛行機などに乗る時の基本手順や礼儀について理解させたりする。同時に、交通の発展史から、子どもの創造意識を形成させる。また、交通がもたらす問題、例えば、騒音、排気ガス、農作地の占用、エネルギーの減少などについて考えさせ、小さい時から環境意識を持つようにする。

「通信と生活」では、通信、メディアと生活の関係を理解させるとともに、子どもの社会生活能力を育成する。即ち、現代の通信方法を認識させるとともに、様々な通信方法を選択、活用することができるようにする。また、現代のメディアについて理解させるとともに、どのようにメディアを活用して情報を収集するかまたは生活中の問題を解決するかなどを分からせる。このような学習を通して、通信に関する法律や制度を守る道徳的規範、情報に対する分別能力などを育成する。

3. 第5学年における全体構成と内容領域

表3は、5学年の全体構成を示したものである。表

3のように、各巻は4単元からなっている。また、各単元は3～4の課からなっている。

上巻では、学校、家庭、地域社会を背景として、特に祖国に対する認識と理解に重点をおき、「誠実と信用」、「民主生活」、「祖国の山水愛する」、「大家族である多民族国家」の4つの単元からなっている。

「誠実と信用」では、社会生活の中で人間が守るべき法律的行為準則の一つである「誠実と信用を守る」ことについて理解させる。そのために、個人の生活中での体験から社会にいたるまで、誠実と不誠実に対する感受、誠実に関する物語や名言、生活中の誠実と信用問題などを事例として、誠実の価値や意義を認識させる。そこから、誠実は個人にとっては道徳的素養であること、社会としては法律的準則であることを理解させる。子どもはこのように、誠実と信用問題に関する分析、討論活動を通して、正しい荣辱感を樹立し、正義感と社会的責任感を形成する。

「民主生活」では、民主をめぐって、クラスの民主生活から学校、社会の民主生活における民主選挙、民主生活への参加、民主生活の管理などの活動を通して、民主意識を育成し、民主生活に参加する能力を高めさせる。例えば、クラス長の選挙活動を通して、民主的協定の意義を感じさせ、人のために働くクラス長の役割などを分からせる。また、社会中の民主選挙活動に参加したり、村（居）民委員会の選挙活動を分析したりする活動から民主意識を高めさせる。

3学年ではクラスや学校の活動に積極的に参加することを重視していたが、ここでは社会の一員として果たすべき責任、義務について理解させ、社会生活における自分の役割を十分に果たすようにする。

「祖国の山水を愛する」では、広々とした祖国の国土、行政区域と生活の関係、祖国の山水などについての内容から、国土に対する愛の感情、山水を愛する感情と自然保護意識を育成する。これは子どもの国土意識の形成に役立つ。また、より重点となっているのは統一問題である。ここでは、台湾問題を取り上げ、台湾の地理的情况から政治的な問題にわたって統一について理解させる。そこから、統一問題における中国政府の意志と努力を分からせ、常に統一意識を持つようにする。それ以外にも、人民解放軍についての認識を通して、国防意識を樹立させる。このように、愛国主義教育は4学年で自分の故郷を認識することから、ここでは祖国の具体的な部分から全体を認識させるような方法で行っている。

「大家族である多民族国家」では、中国は統一した多民族国家であること、中華文明は各民族が共同的に創造したものであること、各民族の風俗習慣や生活様

表3 第5学年における「品德と社会」の全体構成

巻	単元		課
上巻	1	誠実と信用	・私を信じて ・誠実と信用の大切さ ・誠実と信用が必要な社会
	2	民主生活	・クラスの選挙 ・集団のことは誰が決めるか ・参加者としての私 ・社会生活中の民主
	3	祖国の山水を愛する	・広々としている祖国 ・美しい山と河 ・祖国の宝島—台湾 ・祖国の防衛者
	4	大家族である多民族国家	・五十六個の民族 ・手と手をつなぐ各民族 ・世界各地の華人
下巻	1	成長の喜びと悩み	・生活中的喜び ・常に快い気持ちを持つ ・苦しみを味わおう
	2	根源を知ろう	・衣食住の古今（一） ・衣食住の古今（二） ・火災中の文化：陶器と青銅 ・漢字と本の物語
	3	魅力のある中華文化	・偉大なる祖先 ・我が国の国宝 ・我が国の国粹
	4	私たちの生活している地球	・紺碧の地球 ・私たちの地球 ・地球上の人々

（課程教材研究所編、義務教育課程標準実験教科書『品德と社会』第五学年（上巻、下巻）人民教育出版社、2004年より筆者作成）

式、海外同胞の生活状況と祖国に対する貢献などについての認識を通して、中華文化の進歩意識、民族団結と相互尊重意識を育成する。

下巻では、まず、子どもの成長にける喜びや悩みに関する内容を通して、正しい生活態度、強い意志と信念、行為などの道徳的資質を形成させる。次に、食べる、着る、住むという衣食住行などといった物質生活と漢字、本の歴史、陶器と青銅器などといった精神生活という2つの面から、文化の発展史を古代歴史の観点で探究させる。このような学習を通して、中国先祖の知恵と創造を体験、感受させ、中国歴史の文化的素養や民族の自尊意識を持った中国人を育成する。さらに、偉大なる中国人（例えば歴史人物、歴史的文化経典など）、中国の国宝（例えば、文化遺産、万里の長城、兵馬蹄など）、中国の国粹（例えば、特有の文化、京劇、武術など）に関する理解を通して、先人の思想、精神を学ばせたり、文物保護意識と責任感を形成させたり、中華文化の高揚と継承の態度を高めさせたりする。最後に、初歩的地理知識、例えば、地球とはなにか、地球をどう認識するか、地球上の大州と大洋、人種、言語などについての世界的内容を通して、初歩的な地理的、多元文化的認識と基本的なグローバル意識を形成

させる。

4. 第6学年における全体構成と内容領域

表4は、6学年の全体構成を示したものである。表4のように、各巻は4単元からなっている。また、各単元は3～4の課からなっている。

上巻では、子どもたちに祖国の過去と現在、世界の文化について理解、認識させるために「文明に向かって」、「屈しない中国人」、「勢いよく走る祖国」、「世界を漫遊する」の4単元が用意されている。

「文明に向かって」では、科学技術、社会発展、社会文明、健康で文明的なレジャー生活などに関する内容を総合的に結びつけ、科学技術の発展による物質生活と精神生活の豊かさを認識させる。また、社会文明の諸現象に対して、正しい価値判断ができるし、レジャー生活において正確な態度や選択ができるような生活能力を育成する。

「屈しない中国人」では、近代以来の祖国の歴史と発展及び中国共産党の誕生と革命的闘争などについての歴史内容を通して、祖国の発展過程を認識させ、民族自尊心、愛国心、国家富強の精神などのような感情・態度・価値観を形成させる。

「勢いよく走る祖国」では、「東亜病夫」からオリンピック金メダルの獲得、2008年オリンピックの主権に至る現代の歴史内容を通して、日々を高まっている中国の国際的地位を感じさせる。また、食卓上での変化と工業の発展に関する内容を通して、工・農業生産の急速な発展を体得させる。これらの学習を通して、祖国の発展に誇りを持たせ、中国共産党を愛する感情を持たせる。

特に、現在の子どもたちは、国家間の交流が頻繁に行われているグローバル時代の中で生活している。そのため、「世界を漫遊する」では、世界の古代文化遺産の認識を通して、古代文明に対する子どもの興味や関心を持たせる。また、地図を用いて、周辺国家の地理的状況、文化的風俗習慣、隣国との関係などについて認識させ、他国と交流し、協調し、他国を尊重するなどの意識を形成させる。それ以外にも、古代文明の搖籃であるギリシャ、芸術の都市であるパリ、国際的大都市であるニューヨークなどの国家や都市を取り上げ、理解させることを通して、国際意識を持たせる。

下巻では、まず、人間との付き合いのルールや方法を身につけさせるために、人とどう付き合うかをテーマとして考え、討論させる。

次に、「人類の生存空間」では、現在の世界三大問題である人口問題、資源問題、環境問題について認識させる。そのために、人類は地球のために何をしたか、

表4 第6学年における「品德と社会」の全体構成

巻	単元	課
上巻	1 文明に向かって	<ul style="list-style-type: none"> ・科学技術がもたらすもの ・みんなで話し合う社会文明 ・健康で文明的なレジャー生活 ・拒否を学ぶ
	2 屈しない中国人	<ul style="list-style-type: none"> ・忘れられない屈辱 ・起きよ、 ・奴隷になりたくない人々 ・中華民族の決起のために
	3 勢いよく走る祖国	<ul style="list-style-type: none"> ・立ち上がった中国人 ・繁栄する祖国 ・貧困から小康へ ・世界に向かって
	4 世界を漫遊する	<ul style="list-style-type: none"> ・祖国の周りを観察する ・世界一周の旅行 ・文化の風采
下巻	1 私とともに	<ul style="list-style-type: none"> ・男子と女子 ・友だち同士 ・和やかに共存する
	2 人類の生存空間	<ul style="list-style-type: none"> ・だった一つの地球 ・地球のためにできること ・災害に直面したとき
	3 世界とともに生活する	<ul style="list-style-type: none"> ・戦争中での苦難 ・平和の鳩を放す ・手と手をつなぐ
	4 さようなら私の小学生生活	<ul style="list-style-type: none"> ・私の成長の足跡 ・別れに際して

(課程教材研究所編、義務教育課程標準実験教科書『品德と社会』第六学年(上巻、下巻)人民教育出版社、2005年より筆者作成)

地球は人類に何をもたらしたかという問いから人類と地球の相互関係を認識させ、環境意識を形成させる。また、地球のために私ができることはなにかを討論させて、環境保護意識や環境に対する責任感を高めさせる。その以外にも、地震や火災などの災難にあったときどうすべきかを、心理、知識、態度などの面で討論させる。

「世界とともに生活する」では、国際社会における平和問題と発展問題について理解させるため、歴史的観点、戦争の中で生活している子どもたちの苦情などから戦争の影響を認識させる。また、平和問題について、国連を理解させたり、中国の政策や原則などについて認識させたりする。これらの学習を通して、国際社会に関心を持たせ、グローバル意識を形成させる。このように、上巻では人類文化の視点から、異なる地域や国家の文化を理解させ、その文化的相違を尊重し、世界文化に対して興味や関心を持つ多元文化意識を形成させようとしている。しかし、下巻では、世界の平和と発展、科学技術、経済や文化生活などの面から出発して、子どものグローバル意識、平和意識、協調意識などを育成しようとしている。

以上、小学校最後の一年である6学年では、学習内容をより総合的に深め、子どもの視野をより広げること重視している。また、地理と歴史の内容に関する

知識獲得よりも、感情・態度・価値観の形成を重視している。

IV. 教科「品德と社会」の内容構造とその構成原理

1. 内容構造

以上紹介してきた各学年の内容をもとに、教科「品德と社会」の全体構成の構造を明らかにすると、図1のようになる。

教科「品德と社会」における学習内容は、まず3学年では、自分と社会とのかかわりの中で、社会を初歩的に認識する学習を行う。その中で、子どもたちは人間の相互依存関係や共存共生関係などの道徳を形成すると同時に、ルール意識、責任意識などの社会性を発展させる。

4学年では、社会をより総合的で具体的に認識する学習を行う。そこで、命、安全、消費などの学習内容を通して、命を大事にする態度や安全意識、消費観念、他人への思いやりなどの感情、態度を形成する。また、故郷、生産、交通、通信などを取り上げ、生活の関係の中でそれらを認識することを通して、社会生活能力を高める。

5学年では、子どもの心理的側面から出発して、誠実と信用、喜びと悩みなどに関する理解を通して、日常生活の中で備えるべき行為準則を形成する学習を行う。また、民主、祖国、民族などを取り上げ、民主意識や愛国心、民族団結意識などの社会性を発展させる学習を行う。

6学年では、社会文明に関する学習を通して、正しい道徳的資質と態度を形成する。同時に、祖国と世界の歴史、地理に関する学習を通して、愛国心とグローバル意識を形成する。

そのために、各学年では子どもの生活領域である個人、家庭、学校、地域社会と故郷、祖国、世界が同心円拡大原理に基づいて展開されている。同時に、社会関係（人間関係、社会規範、規則、法律、制度など）と社会環境（時間、空間、文化、自然、環境、政治など）が総合的に編み込まれ、子どもたちが社会を認識し、社会に参加しやすいように組織されている。その中で、子どもたちは成長していくようになっている。

2. 内容構成原理

以上考察してきた内容とその構造をもとに、教科「品德と社会」の内容構成は、以下の3つの原理が組み込まれていると考えることができる。

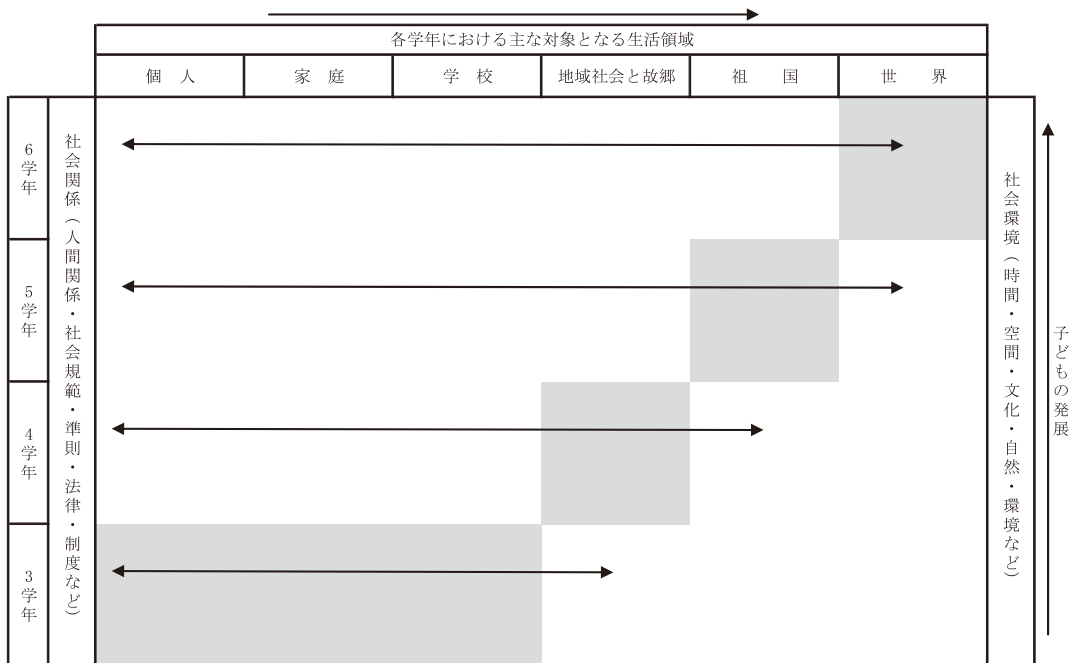


図1 教科「品德と社会」の全体構造

(注：網掛け部分は重点部分)

第1に、教育内容原理として、子どもの現実生活の中で、発見できるし、理解できるし、感じられる社会現象や社会事実を学習内容として取り上げている。また、これらを地理、歴史、文化、政治などに関する知識と結び付け、子どもの道徳性と社会性を同時に形成させようとしていることである。

第2に、教材配列原理として、個人、家庭、学校、地域社会と故郷、祖国、世界という生活範囲が拡大する同心円拡大原理に基づいて、単元の基本構成を決定している。同時に、社会生活の諸要素である社会関係、社会環境、社会活動などを総合的に編み組んでいることである。

第3に、教材選択原理として、子どもの身近な社会生活を基礎として、各学年の教材を選択していることである。子どもの良好な道徳の形成と社会性の発展は社会生活と密接にかかわっている。そこで、社会生活の中で、子どもの道徳性と社会性の同時形成を促すために有効なものを教材として選択していることである。

V. おわりに—教科「品德と社会」の成立の意義—

このような内容構成原理を内包する教科「品德と社会」の成立の意義としては、次の2点を指摘することができる。

第1の意義は、子どもの健全な人格と良好な道徳的習慣及び個人、他人や社会に対する責任感を育成するために、子どもが社会を理解・認識し、社会参加できるように、学習過程と方法、感情・態度・価値観の形成をより重視した学習活動を行うことを可能にしていることである。

第2の意義は、地理や歴史の知識をただ知識として獲得するのではなく、子どもが理解・認識しやすいよ

うに、社会生活においてよく知っている現代の状況や問題から出発して、現実生活とともに分かりやすく学んでいくことを可能にしていることである。

その意味で、教科「品德と社会」は、子どもたちが社会に関心を持ち、国家の歴史や文化、民族を理解し、積極的に社会生活に参加する態度や能力、社会的問題を分析、解決する能力などといった「公民意識」を育成する公民教育を行う教科として成立されたと考えることができる。

【注】

- 1) 「citizenship education」は「市民性教育」、「シチズンシップ・エデュケーション」などと訳されているが、中国では「公民教育」という訳語が広く使用されているので、本論文では「公民教育」とする。
- 2) 例えば、最近の著作だけを上げると、趙亜夫著『行動を学ぶ—社会科課程公民教育の理論と実践—』高等教育出版社、2004年、王文嵐著『社会科課程の中での公民教育研究』中国社会科学出版社、2006年、王嘯著『グローバル時代における中国公民教育』福建教育出版社、2006年、趙暉著『社会転換と公民教育—中国公民教育目標と内容体系の構築—』2007年、などがある。
- 3) 王文嵐著『社会科課程の中での公民教育研究』中国社会科学出版社、2006年、p.6。
- 4) 趙亜夫著『行動を学ぶ—社会科課程公民教育の理論と実践—』高等教育出版社、2004年、p.32。
- 5) 中華人民共和国教育部制訂『品德と社会課程標準（実験稿）』北京師範大学出版社、2002年、p.1。
- 6) 同上書、p.1。
- 7) 同上書、p.1。
- 8) 同上書、p.5

(主任指導教員 小原友行)